
バカとテストとアイドルマスター

柊稜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとアイドルマスター

【Nコード】

N5914Z

【作者名】

柊稜

【あらすじ】

たった十二万で一年間を生き抜くことになった浅井真理。途方に暮れていた彼を救ったのは、渋いおっさんだった。

アイマスとのクロス？・・・コラボを予定しています。

文月学園（前書き）

という訳で、前々からあーだこーだ言っていたものを始めてみました

ISとの平行なので、間違いなく更新は落ちます d)・・・”(

文月学園

「・・・はあ」

俺は、どうしていいかも分からずにただブラブラとあたりを歩く正直、これからの一年間に絶望しかない

「1年12万でどう過ごさせていうんだよ・・・」

おそらく、派遣の人とかだってもう少しはあると思うぞ。勝手な予測だけだな

なにがあったかというのだ、朝起きたら12万とともに書置きがあった

『まーくんへ 突然ですが、おかーさんとおとーさんは欧米一周旅行に出かけることになりました！いやあ、これもまーくんに手がからなくなったおかげだよ。多分一年は戻らないと思うから、その間そのお金で頑張ってねー^^ byおかーさん』

一瞬、目を疑ってしまった

目の前には12万

そしておそらく一年は稼ぎ手がないことを宣告する文章

俺は、通帳とか暗証番号とかしらん。だから、銀行にあっても下ろせない

「ふざっけんなああああっ！」

・・・という事があったのだ

そしてあの二人は生活費オンリーで12万置いていったようだ

「学費、どうすんのよ」

と、俺は途方に暮れていたのだ

さっとバイトでも見つけないと、すぐに生き倒れちゃう・・・

「んんっ？ 少年よ。どうかしたのかね？」

不意に、そんな野太いおっさんの声が聞こえた

清涼祭アンケート

学園祭の出しものを決めるためのアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しいものは何ですか？』

姫路瑞希の回答

『クラスメイトとの思い出』

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出しものも

いいかもしれませんね。写真館とかも候補になりえると覚えておきます

吉井明久の回答

『カロリーー』

この回答に君の生命の危機が感じられます

浅井真理の回答

『生きていけるだけの資金』

・・・え？

- - - - -

で、そんなことがあった三ヶ月後

桜色の花弁が散り、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節

俺は浅井真理あさいまさみち

ミステリアスなイケメンで背のたか

「いや、むしろ童顔チビ助だな」

「そこ！黙らっしやい！」

地の文に突っ込んでくるとは。まったく・・・

こいつは坂本雄二、赤い短髪と、ゴリラのようなゴツイ体が特徴だ
ガタイの通り、中学では不良。小学生のころは神童とか言われてい
たけど今は昔の話

しかも、学年首席で幼馴染である翔子に熱烈ラブコールくらってる
のに本人は拒否している。ブサイクのくせに

ちなみにこいつと翔子とは小学校から今までずっと一緒に上がって
きた仲だ。ブサイクだがな

人は幼馴染と言うだろうけど、はつきりいつて腐れ縁だ。ブサイク
だからな

「ブサイクブサイクうつせーぞコラ」

「ははは・・・」

で、そんな雄二の隣で苦笑いしてるのは吉井明久
はつきりいつてしまえばバカ。いい意味でも、悪い意味でも。

どこぞのヘタレゴリラよりはずっと好感のもてるタイプの人間だ

高校入学からの仲だが、いつも気がつけば雄二と一緒にいるんで何
かやってた

結果ついた異名が『3バカ』だった

ちなみに、明久は観察処分者という学園一不名誉な称号を持ってい
たりする

「お前も、持ってるだろうが」

「いちいち地の文に口をはさむなっ！それに、男には守らなければ
ならない一線があるんだよ！一線が！」

「・・・その一線も、呆気なく越えられる運命」

「おわっ。ムツツリー二いつの間に」

「・・・最初からいた」

こいつは土屋康太。はつきりいって『寡黙^{ムッリーニ}なる性識者』という渾名の方が有名

エロに対する執着はものすごいのに、ちょっとした露出で鼻血を吹く程初心

あと、自分の下心はモロバレでも隠し通す

「・・・失礼な」

「失礼って言われても。それ以外に話すようなことないし・・・」

「っていうか、もうチェンジだよ？ほら、守備守備」

「お、みたいだな」

「あいつら、凡退しやがって・・・」

俺が通っている文月学園では、『清涼祭』なるものの準備が始まりつつある

どのクラスも、焼きそばやらベタな物をやろうとするとところや、広い教室を利用してお化け屋敷をやろうとするクラス
どのクラスを見ても活気であふれている

んで、俺たちのクラスはというと・・・

「吉井！ こいつ！」

「勝負だ、須川くん！」

「お前の球なんか場外まで吹き飛ばしてやる！」

俺たちは、グラウンドで勝手に活気づいている

俺はあんなクラスでじっとしてられるほど・・・

「貴様ら、学園祭の準備をさぼって何をしているか！」

「やばい！鉄人だ！」

ものすごい勢いでこっちに走ってくる担任の鉄人・西村宗一
奴は無駄に足速いから、大抵のヤツはつかまるな

「吉井！浅井！貴様らがサボりの主犯か！」

「なんで何かあるたびに俺らになるんだよっ！」

「雄二です！クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです！」

「そうなのか坂本！」

よし、鉄人の視線が向こうにそれた！今ならば逃げられ・・・

「浅井、そんなに慌ててどこに行く気だ？」

ギクウ

「きよ、きょうしつにも、戻ろうかと・・・」

「なら、先に戻っている。もしいなかったら、明日から雑用が増えると考えとけ」

「い、いえっさあー・・・」

ああ・・・おつかねえ

教室に戻ってしばらくした後、体が震えるような声の鉄人の恫喝を聞いた

「て、鉄人も大変だなあ・・・」

文月学園（後書き）

という訳で一巻飛んで二巻の内容からでした

二年Fクラス

ここは、俺の所属するFクラスの教室
結局、全員鉄人に連れ戻されてきた

床は御座をしいただけ。机はみかん箱じゃあ誰でも広い校庭に逃げ出したくなるわな
ちなみに、学年の成績上位者で構成されたAクラスはリクライニングシートだったりと超がつくほどの格差がついている

とまあ、そんなことはさておいて

「そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

いやむしろ過ぎてるくらいですからね

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権をゆだねるので、後は任せた」

ああ、やる気ないオーラが漂ってるよ

あいつは興味の無いことに関してはいつもこんな感じだ

「吉井君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

そう言う姫路の声が聞こえて来たのは、俺の席が明久の前にあるからだ

姫路瑞希

絵に描いたような優等生で、実際の成績なら学年次席クラスの学力がある

にもかかわらずこのクラスに居るのは、熱出して途中退席したからだとか

でも、俺は姫路よりは島田の方が・・・いやでも・・・いやかし・

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

島田美波

ポニーテールが特徴のFクラスに二人しかいない女子のウチ一人ドイツ帰りの帰国子女で、字が読めればそれなりに点が取れる字が未だ読めないときがあるからこのクラスに居るんだがな

「え？　ウチがやるの？　うん・・・、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな？」

「雄二。実行委員なら、美波よりも姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

なんてことを明久がいつている

大方、事が荒立たずに済むと思ったんだろうな。でも・・・

「姫路は無理だろ。多分全員の意見を丁寧に聞いてるうちにタイムアップだ」

「姫路には速さがたりないからなー。それを重視して考えると、多少荒くとも島田の方が適任かもな」

「多少荒くは余計よ。・・・それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？　そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

召喚大会はペア出場なのか
翔子でも誘って・・・いや、翔子は無理か
代表だからあいつも忙しいだろうし

「秀吉かなあ・・・」

うん。そこが一番無難だな

「？ 真理よ、ワシがどうかしたのかの？」

「お、秀吉。いいところにいたな」

木下秀吉

女のような顔をしているが一応れっきとした男だ
演劇部で、声真似とかが上手かったりする

「召喚大会と一緒に出ないか？ 出たいんだけど、ペア組む相手がいなくてな・・・」

「誘ってくれたのはありがたいのじゃが、ワシは演劇部の公演があるから無理なのじゃ」

ああ。それは仕方ないな

「分かった。他をあたってみるよ」

「すまんの・・・」

「いや、いいってことよ」

何がいいのかはよく分からないが、とりあえずそう言っとく
さて・・・あてがなくなってしまった

他の奴らなんて実力お察してくださいレベルだしなあ・・・

あいつらは、多体一の状況だからこそ勝てるのであって、決闘とかそういう一対一には不向き

ムツツリー二は保健体育以外はF並で安定しないし・・・

「うん・・・」

「・・・真理、上の空になってないで、こっちの話を続けてもいいか？」

「あ、悪い雄二。・・・んで、島田が実行委員って話だっけ？」

「だからウチは召喚大会に出るっていつてるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それならいいだろう？」

で、しばらく議論のあった結果、なんだかんだで明久になった

「なんだか、僕はいつもこんな貧乏くじ引かされてる気がするよ・・・」

そういう星の下に生まれたんだろ。諦めも肝心だぞ

「んじゃ、後は任せたぞ。ふあ・・・」

「お前もお前で、少しはヤル気出したらどうなんだよ・・・」

「めんどくさい」

「さいですか。・・・で、翔子とはあのあとどうなったんだよ」

「あのあとつーと？」

「ったく・・・。試召戦争のあとだよ。『私には、雄二しかない』なんて言われて何もいないなんてことはないだろ？」

あれっきり携帯にかけても通じなかったし、お楽しみでもあったん

だつたら野暮だつたかな？

「急に体が痺れて・・・気づいたら体を縛られて床に転がされていた」

わお。随分と激しかったようだ

翔子がヤンデレにならないように・・・あれ？手遅れ？

「まあ、今まで待たせたツケだと思え。男なら、愛で乗り切れ」

「今までのツケで死にたくはないんだがつ！？」

「じゃあ、つまねえ意地張ってないで自分に素直になればいいんじゃないか」

「・・・意地なんかじゃねえよ」

「はあ。あのな、雄二」

ガラガラ

そんなときに鉄人がやってきた

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

そっぴや、出し物を決めてたんだっけ

ヘタレゴリラにかまつてる場合じゃなかった

えっと・・・候補は

「候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』」

ムツッリーニ提案ですね。分かります

「候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』」

「候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』」

なんつーネーミングセンスしてんだよ

「・・・補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな」

鉄人は、こめかみを押さえながらそうつぶやいた

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

みつともない言い訳をする、みつともないクラスメートたちに、鉄人が一喝
さすが鉄人。いうことが違

「先生はな、馬鹿な吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言ってるんだ！」

「それが教師の言うことかあっ！」

さらっと酷い事をいう。明久が泣いているぞ

「まったくお前たちは・・・。少しはまじめにやったらどうだ？ 稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちにすらならないのか？」

「それってありだったんですか？」

「アリも何も、そうでもいわないと、お前たちはやる気をださんだろ」

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

急にやる気が出たクラスメート一同。なるほど、流石だ

しかしまあ『カジノを作ろう』だの『焼きトウモロコシを売ろう』だの、話が次第に脱線してきた

個性の強い連中が多いせいか、まとまりがない。これをまとめられんのって雄二だけじゃ・・・

「ZZZ・・・」

奴め、寝てやがった！平和そうな面しやがって！

「とにかく静かにして！ 決まりそうにないから、店はさっき上がった候補の中から選ぶからね！」

業を煮やした島田が決めにいった

一度決まればなんだかんだいってそれぞれやりだすだろうから、これも一つの解決策だな

多数決の結果、2・Fの出店は『中華喫茶ヨーロッパアン』となった
当然といえば当然というか、こんな設備で飲食店とは。問題山積み
だなあ・・・

「ああそうだ先生」

「ん？　なんだ？」

「放課後、学園長室に行きたいんです。出来ればアポとっておきたいんですけど・・・」

「珍しいな。何を話すかは知らんが、話は通しておいてやろう」

「ありがとうございます」

「許可されるかは、知らんがな」

さて、仕事するか

お仕事

コンコン

ノックの後、相手の応答を待つ

「入りな」

OKサインが出たので、襟元を正してから入室する

「失礼します」

「それで、あたしに話ってなんだい？」

ここは放課後の学園長室

何だか無駄に高そうなのがいっぱいある

なんの書類かは分からないが、ざっと目を通しては顔をしかめている

「では、お忙しいようですので本題を。・・・清涼祭にウチのアイドル達を使ってもらったための、交渉をしに来ました」
「はあ？アイドル？」

そういうと、藤堂カヲル学園長は目をあげる

ある時、俺は『芸能プロダクション 765プロ』の代表取締役社長、高木順二郎と名乗ったおっさんにあつた
で、目付きを気にいられてそのまま事務所に連れてかれ、プロデューサーとしてスカウトされた

金に困っていたこともあり、俺は即決だった

「ええ。・・・とはいっても、まだまだこれからなんですけどね」

「アンタ、振り分け試験をサボったのもそれが原因かい？」

「ま、まあ、そう言われれば、そうなんですけど・・・」

即決したはいいが、就職の手続きやら、先輩からのアドバイスを聞いたりで、振り分け試験に出ることができなかったのだ
まあ、事前にテストの事を言わなかった俺の落ち度だから、Fクラス入りは仕方ないと割り切るしかない

学園長の目が細くなる。心証悪いだろうなあ

「じゃあ、ダメさね。学業をおろそかにしている生徒のいう事を、おいそれと聞くわけにもいかないのさ」

「そ、それは、そうですが・・・」

結局、これを言われてしまえば俺は返せない
返し方が分からない

「・・・とまあ、普段ならそう言ってるんだが、一年次の成績を見る限り学業を疎かにしているとは思えない。それに、礼儀もしっかりしている方だから、それに免じて仕事をやってもいい」

「本当ですか!？」

敬語やマナーについて、しっかり聞いておいて正解だった

「あたしからやれる仕事は、召喚大会への出場だけさね。それでいいかい？」

「あの、ライブはよろしいのでしょうか？」

「アンタらの好きにするといい。ただし、学園経営つても金が掛

かってね。アタシからはビター文も出せないよ」

それだでも充分だ

文月学園はちよいと特殊なシステムを導入しているため、各企業や他校の関心も高い

結果や行動次第では、企業への宣伝にもなる

「もちろんです！それで、人数の方は？」

「焦るんじゃないよ。慌てると、貰いが少なくなっちまうよ？」

「うつ・・・す、スイマセン」

胆に銘じておこう

「で、人数ねえ・・・。そうさね。ざっと4人ぐらいいれば十分だろうね。ゲストみたいな感じになるから、空き時間は清涼祭を見て回って欲しいね」

「はい、ありがとうございます」

「ああ、先もいったようにウチから払える金は無いからね。召喚獣作成とか、操作指導とか、そういったサポートでチャラにして貰っていいかい？」

「・・・なんつーか、これ考えてたのか？」

下手に食い下がれば振り分け試験のネタで話を蹴られかねないし、素直に飲むしかない

「わかりました」

「じゃあ、他に詳しい話はまた明日。用が済んだなら、さっさと帰んな。後がつかえてるんだよ」

「失礼しました」

ぼろっちい教室に戻ってみると、そこには島田と秀吉がいた

ちなみに、他の奴らはとっくに帰ったようだった

「あ、浅井」

「みないと思っっていたら、何処にいつておったのじゃ？」

「用事があつてな。学園長室の方に行つてた」

ここでウソをいってもしょうがないか

「・・・アンタ、また何かやったの？」

「学園長室に用があるとは、珍しいのう」

「失礼な。俺だつて学園長と話したいことの一つや二つあるさ。・・・

・で、二人で何やってんの？」

「いまね、アキを待つてるの」

「明久を？ また、なんで？」

「雄二の奴を清涼祭に引つ張り出すために、一働きしてもらつているのじゃ」

「あー・・・なるほど」

明久を使つたところで雄二の奴が動くとは思われないけどな・・・
あいつ寝てたし、出店が何になつたかなんて知らないだろうな

「うん。今回の清涼祭をどうしても成功させたいの。そのためには坂本の力を借りないといけないって思ってる・・・」

このクラスの奴らは俺を含めて教師陣でも手に余る連中が圧倒的に多い

統率できるのは同じバカである雄二ぐらいなものだろう

その雄二がいないんじゃ、出店が成功する可能性は低いわな

「で、その雄二は何処に居るんだ？」

「それがね、アキが言うには『みつかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言ってたみたいなのよ」

「大方、霧島翔子から逃げ回っておるのじゃろうな」

あー・・・

「何があつたかはよくわからないけど、どうも須川情報によれば付き合うことになったんだってな」

「どうして須川が知っているのかは疑問だけど、だいたいそんな感じね」

「雄二本人は否定しとるのじゃが」

あいつ、普段は色々と大胆というか、傍若無人な節があるのに翔子のことになると弱いからなあ・・・

「逃げ回ってるんだつたら、大方女子更衣室にでもいるんじゃないかな？」

雄二のこととなると、翔子は女子禁制のところでも平気で入ってゆくだったら裏を突いて男子禁制の場所へというのが、雄二の考えだろうな

多分これぐらいなら明久でも翔子でも思いつくと思う

「・・・何でそんな発想にたどり着くのよ。変態」

「えっ？」

ものすごく冷めた目で島田が睨んでくる

「突拍子もなくそんなことを言ったものなら、誰だって変態と思うものじゃ」

「・・・島田」

「なによ？」

「勘違いしてもらっちゃ悪いが、俺は紳士だ！」

「・・・あんたが言っと、頭に『変態』がつきそうね」

失礼な！それって今の印象で決めただろ！

俺はいつだってジェントルメンだ！

「って、話がそれたな。・・・それで雄二引っ張り出してまで成功させたいのは」

「あ、アキからみたい。ちょっと、ゴメン」

どうも島田のケータイがなったようだ

あれ？ 秀吉が咳払いしてる

ピッ

「もしもし？ 坂本？・・・ちょっとまって。今替わるから」

そういつて、島田は秀吉にケータイを渡した

「・・・雄二。今どこ」

喋ったのは秀吉

でも声は翔子のだった

・・・秀吉つて声真似もできたんだ

「で？どうだった？」

「『人違いです』と言われたと思ったら、切られておったのじゃ」

とつさの判断で人違いというとは・・・
元神童は伊達じゃないといったところか

「じゃあ、俺は帰るわ」

「え？なんで？」

「行くところあるからな。じゃーな」

「あ、ちよつと・・・」

ぼろつちいを通り越した教室から出ると明久とはち合わせる

「あ、真理・・・」

「お、明久。俺はもう帰るわ」

「ちよ、ちよつとまっつてよ！」

「真理、いっちゃったね・・・」

「ほつとけ。人には人の事情があるんだよ」

「真理にも話しておきたかったのになぁ・・・」

「最近、浅井ってすぐ帰っちゃうよね」

「あ、美波に秀吉」

「しかしまあ、今日の真理はどこか上機嫌じゃったのう」

秀吉は演技に精通している

だからかな。人が隠している物をあっさり見破ってしまう

「秀吉がそういうならそうなんだろうね」

「でも、なぜかは分らんぞ」

「大方、女でも出来たんだろうな」

くっ・・・女ができた・・・だとっ!?

「というか、今は浅井の隠しごとよりも大事な話があるんだから!」

「そうじゃったの。学園祭を成功させるって話じゃったな」

「島田、俺を引っ張り出してまで成功させたいのはなんでなんだ?」

「実はね・・・」

そこで、美波は姫路さんの転校の話をした

お仕事（後書き）

という事で、真理のそれっぽいお仕事でした
アイドルのケアだけでなく、仕事取るのも仕事の一つですよ？

番外〜バカとアイドルとクリスマス〜（前書き）

メリークリスマス

という事で番外クリスマス企画を出してみました

・・・キャラ的には本編フライング気味ですので、後で順番に変更
入れるかもしれません

番外　バカとアイドルとクリスマス

「メリークリスマス！」

ぱんぱんぱん！

クラッカーの音とともに、くす玉が割れる

そこには、『メリークリスマス　順二郎』と筆で書かれている

今日はクリスマス

雑多な書類や机は整理され、今は事務所のアイドルたちのささやかなパーティが開かれていた

「せっかくのクリスマスなのに、ここでよかったのかね？」

「・・・せっかくのクリスマスだからこそ、ここで祝いたいんだそうですよ」

『せっかくですから、事務所で』

そう俺に言っただけ来たのは他でもない、彼女たちからだっただけ

正直、俺も高そうなレストランを貸し切るよりもこっちの方がずっと楽しい

それに・・・

「僕達まで来てよかったのかなあ？」

「当たり前だ。クリスマスはいろんな人といいたほうが楽しいだろ」

「いや、それはそうだが・・・」

「他のクラスメイトに知られると、ワシら即刻異端審問にかけられてしまうと思うのじゃが・・・」
「気にしたら負けだ」

こうやって、外部の人をこっそり呼べるしな

「だけど、ウチらが来て本当によかったの？」

「当たり前なの」

「あ、美希ちゃん」

「今日は『トクベツ』な日だもん！みんな楽しもうよ！」

「ほら、明久くんや土屋くんも！」

「え、あ、ちょ・・・」

「・・・（バタバタバタ）」

男子陣も、あつという間に中に連れて行かれる

「んっふっふっ。ヒデちゃんあそぼー！」

「わ、わしは男じゃから、せめて「ヒデくん」で・・・」

「それーっ！」

「ちょ、何故ワシの服を脱がそうとするのじゃ！」

「千早お姉ちゃんの衣装が似合いそうだよね」

「ワシは男じゃ！」

「坂本さん！これ、おいしいですよ！」

「ん、どれどれ・・・へえ。この唐揚げうまいな」

「それ、私が作ったんですよ！」

「へえ。天海さんって、料理できるんだ。今度一緒に作ろうよ！」

「明久くんも料理できるの？」

「パエリアをちよっとね」

「・・・雄二も料理は得意」

『ええっ！？坂本くんもできるの！？』
『まあ、お袋があれじゃあ』

『やっぱりクリスマスはオレンジジュースよね』
『でこちゃんだと、「は」じゃなくて、「も」だと思うの』
『おでこのお姉さん、オレンジジュース好きなんですか？』
『葉月は嫌いなもの？じゃあ、この味が分かるまでお預けね』
『伊織ちゃん、なんかこれ苦くない？』

『はて？康太、顔が紅いですよ？』

『・・・なんでもない』

『でも、大丈夫ですか？何だかますます赤くなっているような・・・』

『

『・・・なんでもない』

それぞれがそれぞれの会話をした、和気あいあいとした空間

『・・・お前は、入らなくてもいいのか？』

『私は、こうやって見てる方が好きですから』

『そうなのか？』

『はい。みんなの笑顔、私にはもったいないくらいですよ』

苦笑しか返せない

『それに、私ばかり楽しむのも』

『ただいまーっ！』

『おかえり。響との収録はどうだった？』

『へへっ！ バッチリですよ！』

『自分と真のナイスコンビ、見せたかったぞ！』

『そっか。じゃあパーティー始まってから、参加しておいで』

「え？ プロデューサーはいいんですか？」

「俺は、こうやって見てる方が」

『瑞希ちゃん。その箱は？』

『あつ！そう言えば私、家でケーキを』

「いいと思う訳ないじゃないか！ほら、響、真、千早！行くぞ！」

「お、おーっ……」

「え、ちよつと……」

アットホームで和やかな空気が死屍累々の惨状へと変貌するのを、
未然に防がなくてはっ……！

『あゝヒデちゃんずるい！亜美達だつて姫ちゃんの手作りケーキ
食べたいのに！』

『ああつ！坂本さんどうして食べちゃうんですか！みんなで分けて
食べなくちゃだめじゃないですか！』

『瑞希ちゃんのケーキ、おいしそうだなあ。……私もマネしてみ
ようかな？……どうして明久くんはそんなに首振ってるの？』

『っ！？怪しい気が　康太っ！？何故そんなに急いで食べるので
すか！？私にもひとくち……』

「……男子諸君の反応が聞こえてこないのが、不思議だよ」

「きつと、言葉にならないくらいおいしいんですよ」

「あらあら。羨ましいですね」

「何だろっ。この不吉な予感」

ここは階下の居酒屋たるき亭

上の賑わいは、当然この場所にも筒抜け

765プロの大人たちは、ここから上の様子を肴に酌み交わす

「ところで、律子さんは向こうに行かなくていいの？」

「私は、こういう落ちついたところの方が好きですし、あの子たちの面倒は、真理くんが見てくれるだろうし」

「そっか。たしか律子さんは、お茶でしたよね？」

そういつて、たるき亭の小川さんは、律子に暖かいお茶を差し出す

「ありがとう、小川さん」

「あれ？律子飲まないの？」

「あのねえ、私一応未成年ですよ？お酒を勧めるのは、どうかと思います」

「そっぴやそうだったっけ」

「もー・・・同僚の年齢くらい、しつかり覚えていてくださいよ」
「・・・」

真理の先輩のP、タカはじつと小鳥を見る

「な、何ですか？タカさん・・・」

「小鳥さんってたしか、にじゅうは」「それは、トップシークレットです！」 スイマセン」

「うふふつ。こっちはこっちで、賑やかですね。じゃあ小川さん。いつものお願いしますね」

「はい。えーと・・・あれ？」

不思議そうな顔をする小川さん

「てんちよー。オレンジジュースのチューハイどこですかー？」

『冷蔵庫の中に無いのかー？』

「普通のオレンジジュースしかありません」

『そっぴや、さっき伊織ちゃんがオレンジジュース冷やしてたよなあ？』

大人たちはいつせいに嫌な汗をかきだす

「……まさか」「……」

「さて、危険ぶ……げふん。姫路のケーキも食べ終わったところで」

「結局、兄ちゃんたちが全部食べちゃったもんね」

「真美たちも食べたかったなあ」

やめる。お前たちには刺激が強すぎる

舌がしびれるのをこらえて、さっさと進める

「あ、後でケーキ買ってやるから。ではっ！ここでプレゼントタイム！」

『イエーイ！』

「ルールは簡単っ！自分のプレゼントを持って、曲が止まるまでぐるぐる回していつてくださいっ！ではではミュージックっ！すたーとっ！」

(Ding Dong) 聖なる鐘の音が

「ちょっと待ちなさいっ!」

「え?なんか問題あった?」

「曲よキヨク!せっかくなんだから、この伊織ちゃんの曲を使いなさいよ!」

「いや、だってCDないし・・・」

「ここは事務所よっ!? 探せばあるある!」

そういう伊織は、顔が紅い

「ちょ、伊織っ!? うわ、酒くさ・・・」

「そんなことどうでもいいのよっ! みゅ〜じっくう〜・・・スタ〜トっ」

知らぬが 仏ほつとけない
くちびるポーカーフェイス

「何で、『SMOKY THRILL』・・・」

「そんなの、どうらっていいじゃないの」

「・・・伊織、お前酔ってないか?」

「この伊織ちゃんが、オレンジジュースごときで酔っぱらう訳ないじゃないのー!」

また、酔っ払いの常套句みたいなことを・・・

「つか・・・そのオレンジジュース見せてくれ。飲みやしないから」

「そ〜お〜?・・・はいこれえ」

えーと・・・

「酒じゃねえか！ちよつと下にいつてくるから、千早音楽任せた！」

「ええっ！？あの、ちよつと・・・」

「社長！なんてことを・・・」

俺は、伊織を介抱するためにとりあえずたるき亭へと降りた

「アキいゝ」

「み、美波！？ちよ、酔ってる！？」

「お姉ちゃん！？バ力なお兄ちゃんにそんなことしちゃ」

・・・もう一人、連れて行かないやいけんのか

待っててくれ、明久

「あーあーあー・・・案の定か」

「ほら伊織、島田。これ飲んで」

「ぐびっ・・・ぶはあ」

少しは落ち着いてきたようだったが、明日は二日酔いに泣くんだらうなあ・・・

「ZZZZ・・・」

「あ、寝ちゃった」

「はあ・・・伊織と島田さんは私たちが見てるから、真理は上に戻っていいわよ」

「ういつす。二人のこと、お願いしますね」

そういつて真理は、たるき亭を出て事務所へ戻った

「あの・・・すみません」

「ああ、気にしないでください小川さん」

「でも伊織ちゃんが・・・」

心底申し訳なさそうにこちらを見る小川さん
なんというか、無下にもできないなあ

「じゃあそうですね・・・。一杯奢ってください」

ゴスッ

ナイスなグーが落ちて来た

「・・・音楽、終わったわね」

「じゃあ、今もってるのを開けていいぞ！」

いつせいに今持つっている袋を開ける

「あきぴよんのクッキーだ！やったねっ！」

「真美も真美も！これは・・・なんか黒いね？ココア混ぜすぎたの
かなあ？」

「あれ？私もクッキーだ。面白い色だなあ・・・」

バタリ

「真美いいいっ！」

その顔は、まるで眠っているかのような安らかな表情だった
そんな双子の寸劇の傍ら、顔を真っ青にしているのは男子陣一同
いつせいに姫路を見る

「ひ、姫路さん。プレゼントになにを用意したの？」

「はい、手作りのクッキーです」

((((それだ！))))

とは、自分に回ってこなかった安堵からか、一人の可憐なアイドル
を散らしてしまった罪悪感からか、言い出すことは出来なかった

「・・・み、瑞希の特性クッキーって、何が入ってるの？」

「特に変わったことはしてませんよ？ああでも、隠し味をちょっと
入れましたね」

「隠し味？」

「聞きたいですか？」

うふふと笑う瑞希は、何だか魔女にも見えた

「え、遠慮しておくの」

「そうですか？残念です」

美希は、触れてはいけない何かを感じたのだらう
それっきり追及することなく、辺りは異様な空気に包まれた

「・・・真美、もういいよ？」
『え？』

むくりと起き上がる真美

「じゃーん、ねえねえどうだった？真美の迫真の演技！」
「び、ビックリさせないでよ真美ちゃん。・・・あれ？じゃあ、姫路さんの作ったクッキーは」
「いただきます」

一同がばつと春香を見たが、時すでに遅し
そこには、クッキーをかじった瞬間に、みるみる顔が真っ青になる
春香がいた

真理は、また往復することになった

「うう・・・お腹痛い」
「・・・姫路の料理たべて、それだけで終われるのはある意味幸運だよ」

流石に、クッキーにはそこまでアレンジ加える余地がないようだな
硫酸ブチ込まれてたらどうしようかと・・・
あ、でも炭になるか？どうだったかな・・・

「春香も、二人の隣で休んでな」

「はい・・・すみません」

「謝ることないって。胃薬飲んで休んでれば、すぐ良くなるさ」

時計をちらつと見る

「・・・さてと、ぶつ倒れた奴もちらほらいるが、とりあえず時間もいい感じだし、そろそろお開きかなあ」

『えゝっ・・・』

「『えゝっ』じゃない。そろそろ帰らないと、親御さんたちが心配するから・・・」

「それじゃあ、しょうがないの。ミキももう眠いし・・・あふう」

「そうかもねゝ・・・亜美達もちよつと疲れたし」

聞きわけが良くて何よりだ

春香はともかく、伊織と島田は酔ったまま帰すわけにもいかないしなあ

「明久、島田が目を覚ますまで一緒に居てやれ。お前なら別に問題ないだろ？」

「うん」

「だったら、私も・・・」

「いや、明久だけで十分だ。翔子、雄二と一緒に送ってやってくれないか？」

「でも、葉月ちゃんが」

「・・・わかった。瑞希、雄二。いこつ」

「あ、ちょっと」

三人は事務所から出ていく
女二人だけど、雄二がいれば問題ないか

「秀吉は？」

「ワシは、亜美と真美を送りながら帰るぞい」

「ムツツリーニは？」

「・・・千早と響を」

「あんまり変なことするなよ」

「・・・変なことなんてしない（ダバダバ）」

大丈夫かおい。途中まで秀吉と一緒にだから問題ないだろうけど・・・

「貴音はやよいを」

「わかりました」

「プロデューサー。お疲れさまでした！」

「うん。お疲れ」

いやあ、やよいは元気だなあ

「んじゃあ、雪歩、真、春香、美希は俺が連れてくか」

「はいっ」

それぞれのお店のライトアップが、^{ノエル}聖夜の街を照らしている
私とプロデューサーは今二人っきりでこうやって歩いている

昔の私だったら、『男の人が・・・』って、距離とってたのかなあ？

「なんつーか、あつという間だったなあ」

「そうですね。でも、楽しかったです」

「そっか？そりゃあ、アイツら呼んだ甲斐があるってもんだよ」

プロデューサーは、にっこり笑う

「でも、私はもうちょっと遊んでたかったなあ・・・」

「アイツらなら大丈夫なのか？その、男嫌い」

「はい。なんて言うか、皆優しいですから」

「そっか？明久はともかく、他の奴らは・・・」

プロデューサーは不思議そうな顔をしている

クリスマススのライトアップに照らされて、いろいろな色に光っている

「まあ、雪歩もいろいろ変わってきてるんだなあ・・・」

「はいっ、なんだか最近、自分に自信を持てるような気がするんです」

「そいつは何より。・・・んじゃ、そんな雪歩に俺からのプレゼント」

プロデューサーは、持っていた袋をつきつけて来た

「え？」

「十二月二十四日。雪歩の誕生日だろ？神様の誕生日と一緒にとはすごい偶然だよなあ」

「あ、ありがとございますっ！」

「おう、よかつたらここでつけてみてくれ。ゴミは俺が持つから」

「は、はいっ！」

袋を開けると、それは帽子だった

雪のように真っ白なそれは、頭にすっぽりと収まる

「お、やっぱ似合うな」

「ありがとうございますっ！あの、プロデューサーっ！」

「ん？」

「わ、私、これからもがんばりますねっ！」

「おうっ」

聖夜の夜は、更けてゆく

765プロ

「ちわーっす」

所は変わって765プロダクション

「あら浅井くん。いつもお疲れ様」

口元のホクロが大人っぽい魅力を出している事務員の音無小鳥さん先輩が『むちむちのふとももがイイ』と言っていたのは、男同士の秘密だ

「あ、小鳥さん。こんちわっす」

「うふふ。いつも元気でいいわね」

「ところで、タカさんいますか？ちょっと相談したいことがあるんですけど・・・」

タカさんというのは、俺の先輩だ
本名を覚えてくれなくて、周りがタカさん、タカPって呼ぶから、俺もそう呼んでる

「ええと、タカさんなら今営業で、もうちょっとしたら・・・あ、ほら」

ガチャ

「お疲れさまでーす。お、真理か」

さつきくぐった扉から入ってきたのは、黒のスーツでバツチリ決めた若い男だった

「タカさん！ちょっと聞きたいことがあるんですけど・・・」
「おう、いいぞ」

一方こちらは文月学園

「そうか。姫路の転校か・・・」

ちょうど美波が今までのいきさつを話しおえたところだ

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？ どうして？」

「姫路の親父が転校を進めた理由はおそらく三つ」

そういつてびしっと指を三本立てた雄二

「まず一つ目。ござとミカン箱という劣悪で貧相な設備。快適な学習環境ではないということだな。これは、喫茶店の成功で何とかするだろう」

と、指を一本たたみながら話した

「ふたつ目は、老朽化した教室。これは、健康に害のある学習環境という面だ」

「ひとつは道具で、ふたつ目は教室自体ってこと？」

「そうだ。これに関しては喫茶店の成功程度の収益じゃ厳しい。教室の改修ともなると学校側の協力が不可欠だ」

またひとつ指をたたんだ雄二

確かに、設備程度だったら僕らがお金を出し合えば何とかなる

しかし、教室は学校のモノだ。勝手に改装するという訳にもいかない

「そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまりは、姫路の成長を促すことのできない学習環境ということだ」

部活とかでもそうだけど、自分のレベルアップには周りに自分と実力の近いものの存在が重要となる

学年次席クラスの成績である彼女が、最低ランクであるFクラスにいる限りそんな相手は望むべくもない

「じゃが三水ならどうじゃ？ あやつ、期末では首席じゃったと思うのじゃが」

「そうだな、アイツなら足しにはなるだろうが、親父さん達が知るとでも思つか？」

「それもそうじゃのう。それで、その三つの問題をどうやって解決する気じゃ？ 一つ目はともかく、二つ目、三つ目は難しいのではないか？」

試召戦争なら、全ての問題が一気に片付くのに、こうなると厄介だ

「三つ目についてはすでに島田と姫路で対策を練っているんだろ？」

「うん。この前、どうしても瑞希に頼まれちゃったからね」

「ならよし。で、最後に残った教室の問題だが・・・これは学園長に直訴すればいいだけだろ」

さも当然と言わんばかりの雄二の態度

「それだけ？　僕らが学園長にいったぐらいで何とかしてくれるかな？」

「あのなあ。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？　いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすのなら、改善要求は当然の権利だ」

もしそれでいいのだったら、全ての問題は解決の見込みがあるということだ

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも立てといてくれ。ついでに鉄人を見たら俺たちは帰ったと言っておいてくれ」

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オッケー。任せといてよ」

美波の声援を受け、僕らは学園長室を目指して教室を後にした

「へえ。お前、自分とこの学校から仕事取ってきたのか」

「はい」

腕を組んで、真剣に聞いてくれる先輩

「まあ、学生は流行に敏感だからな。うまく立ち回れば人気も上

がるんじゃねえか？」

「それに、ウチは企業からの注目度もある学校ですので、ひょっとしたらCMに使ってくれるようになるかもしれないと思って」

「ふーん……。ま、アイドルに限らず、人を相手にする職業はイメージ一つでがらりと変わるからな。成功させたいなら、そこらへんにも気を遣えよ」

「ういっす」

うなずきながら、どこか嬉しそうにしている先輩

「それで、俺に相談ってなんだ？」

「今回起用するアイドルについてです。ウチのユニットだけじゃ一人分余るので、『Luciel』から一人……」

「人数は四人か」

あごに手を当てて、暫く考えを巡らせる

ちなみに、『Luciel』というのは、タカさんが担当しているユニットの名前である

フランス語で空という意味のそれは、千早、貴音、響で構成されている

なんでも、『千早が空、貴音が月、響が太陽』だそうだ

「日時は？」

「ちょうど二週間後です」

「……すまん、その日ライブだ」

頭を掻きながら、先輩はそう答えた

「分かりました。じゃあ『Shining Star』の方は？」

これは、美希をリーダーに、やよい、真美で構成された中学生ユニット

タカさんの仕事量は、単純に俺の二倍。過労で倒れないか心配です

「ライブあるから、そっちはレッスンだ。俺は見れないけど、律子が竜宮小町と一緒に見てくれるっていうから」

「じゃあ、そこから一人いいですか？」

「もちろんだ。で、誰にするんだ？」

そうだなあ・・・

「じゃあ、美希で」

やよいと真美を、ウチの学校に連れて来てみよう

Fの連中が野獣 もとい、（変態）紳士になりかねない

そうすると、野獣になってもかわし方を知っている美希がいいだろう。うん。その筈だ

真美はかわすっていうか遊ぶだからな、収拾付かなくなる気がする

「ウィ。律子や美希には俺から言っとくから、お前はスケジュール調整でもしててくれ」

「ういっす。ありがとうございます」

一礼して、各自自分の事務仕事を始める

765プロ（後書き）

書き始めて気が付いた事が一つ

うまく混ぜられる気がしないっ！

暫くは分離状態です。はい

混ぜるな危険な結果にならないよう、頑張ります

ちゅーとりある

清涼祭アンケート

学園祭の出しものを決めるためのアンケートにご協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものがよいですか?』

姫路瑞希の回答

『家庭用のかわいいエプロン』

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、いい考えです

浅井真理の回答

『男：多少コストはかかっても清潔感のある上品な服装』

女：中華喫茶なので華麗なチャイナドレスで大人っぽい魅力』

男性はカフェのウエイターみたいな格好でしょうか

中華喫茶というのを考えると雰囲気にとぐわない気もしますね

服装は店の印象を決める点でも大切な物ですが、そのあたりのコストが上がれば、収入にも関わってくることを頭に入れておいでください

吉井明久の回答

『ぶらじャー』

ブレザーの間違いだと信じています

- - - - -

暫くして、春香、真、雪歩 『紅天女』のメンバーと美希がやってきたので、今回の仕事について話すことにした

「プロデューサーさんの学校でお仕事ですか？」

トレードマークはリボンな春香が尋ねてくる

「おう。『隼より始めよ』 つつーことで、いちばん身近なところから取って来てみた」

「それで、ボク達は何をするんですか？」

菊地真

ボーイッシュな外見と、さっぱりした性格の女の子よく、男の子に間違われるらしい

「んー・・・召喚大会に出てもらうことになっている」

「ライブはないんですか？」

星井美希

タカさんも『素質はかなりのモノ』っていうほどの子高校生にしか見えないが、れっきとした中学生だ
気がつくといつも寝てる

「ライブも一応、組み込む予定だ」

「そうですか。き、緊張してきちゃいました・・・」

「まあ規模は小さめだから、あんまり気遣うことは無いさ」

「それで召喚大会って何するんですか？」

萩原雪歩

気弱な所がある、庇護欲を掻きたてるような子らしいが、ほっておくと穴を掘って埋まる癖があるので注意

「そっぴや、ウチの学校の特徴について話してなかったっけ？・・・長くなるけど、いいか？」

「問題ないです。何も分からないまま行くよりずっとましですし」

「そっか。じゃあ話すか。文月学園にはな・・・」

文月学園にはな、科学とオカルトの偶然の融合が生み出したシステム、『試験召喚システム』なるものが存在する

登録された人固有の召喚獣を作りだすシステムで

「召喚獣？」

ああ。このシステムによって生み出される、分身とも呼べる存在だな
これを召喚者は操ることができる。ま、思いのままに操るには慣れと集中力が必要だな

その召喚獣を用いて戦争を行うのが『試験召喚戦争』。略して『試験戦争』と呼ばれるものだ

「試験戦争・・・ってなんですか？」

簡単にいえばクラス間抗争だな。それぞれの教室設備を賭けて戦う

んだ

「クラス設備って、どのクラスも一緒ですよね？」

ああ・・・言うの忘れたな。

うちの学校は成績順に6クラスに分かれるんだ

最優秀生徒の集まりがAクラス。ここの設備は高級ホテル並みだ
それから次第にクラスランクが下がるのに比例して設備も下がって
いくんだ

で、最低ランクに当たるのがFクラス。はっきりいって廃屋だ

「廃屋って、どんな感じなんです？」

そうだな・・・腐った畳に、傷んだ卓袱台。傷や落書きだらけの壁
に隙間風が吹きすさぶって感じた

しかも、春先にさっき言った試召戦争に敗れ、腐った畳はござ、卓
袱台はみかん箱

ランクの低いクラスが自分よりランクの高いクラスに勝つと、教室
設備をそのまま入れ替えて、負けたらさらに一ランク下がるって
いうワケ

「く、詳しいですね・・・」

一応、俺もFクラスだからな

「うわぁ・・・」

コラ美希。バカを見る目はやめなさい

俺は事情があって試験に出られなかったただけだから・・・

「そ、そうですね？　それで、勝敗条件は何なんですか？」

相手のクラスの成績最優秀者・・・代表を倒すことだな

極端な話、相手のクラスが全員健在でこちらは代表のみだったとしても、その代表が相手の代表を倒せば勝ちってわけ

「なるほど、ありがとうございます。召喚大会もそんな感じなんですか？」

「いや、召喚大会は2VS2の戦いだ」

「ということは、ボクらの中で二人組を二つ作るってことですか？」

「そういうことだ。で、早速明日から操作の練習に入る」

「操作の練習ですか？」

「ああ。さっきもいったが、ある程度自由に使うには練習がいる。

だから、通常レッスンに加えてその練習もやる。帰りが遅くなるから、親御さんにしっかり言っとけよ」

「プロデューサですよ」

「・・・あんなのは親じゃねえよ」

「あ、あの。ど、どうしたんですか？急に落ち込んで・・・」

「あ、ああすまん雪歩」

うちの親は、親と呼べるのだろうか
帰ってきてても暫くは他人扱いだなー

はあ・・・

『・・・』

「ん？なんだその残念な物を見るような眼は？」

「なんでも・・・」

「ないです・・・」

「ははは・・・」

「あふう」

くっ・・・なんだか目線が痛い気がする

「とにかく、明日から早速始めるから覚悟しとけよ！今日は解散！」
『お疲れさまでした』

「あ、そうそう。美希は学園祭まで『紅天女』と行動してもらおう。
いいか？」

「りょーかいなのっ！」

うむ、よろしい

ちゅーとりある(後書き)

はい、試験召喚システム周りのについての簡単なチュートリアルでした

準備期間

清涼祭アンケート

学園祭の出しものを決めるためのアンケートにご協力ください

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（ ）】

また、その時のリーダーの候補も上げてください』

土屋康太の回答

『【？可愛らしさ】　候補・・・姫路瑞希&島田美波』

甲乙つけがたいといったところでしょっかね

浅井真理の回答

『【？その他（細かいところに気の配れる人）】　候補・・・姫路

瑞希　霧島翔子』

確かに、細かい気配りのきいた店は先生も何度も足を運びたくなるものです

先生はよく分かりませんが先の回答といい、お客を相手にする仕事に向いているかもしれませんね

坂本雄二の回答

『【？その他（結婚相手）】　候補・・・霧島翔子』

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

- - - - -

「準備の方は順調かい？」

「はい。おかげさまで」

「それで、またあたしに用があるのかい」

「はい。実は」

・ ・ ・ ・ ・

「まあ、アンタらのところで賄うならいいんじゃないかい？あたしからは、場所しか提供できないよ」

「それでも結構です」

「ま、後夜祭とかぶるからあまり客入りは期待できないかもしれないけど、いいのかい？」

「もちろんです」

「なら、いいけどね。・・・うまくいくといいねえ」

『仕入れルートはOKだ』

『これをそこにだな・・・』

『そついや今度の学園祭、アイドルが来るんだってなー』

『そうなのか！？ビデオカメラを持ってかないと・・・って、今は

準備だ。その話、後で詳しくな」

『そうだよ。設備も関わってくるんだし。よろしくね』

ムツツリーニ。写真

『任せろ』

『雄二、飾り付けはどうするのじゃ？』

ここはFクラス

明久、島田、秀吉の説得のおかげで、雄二の指揮の下で喫茶店の設営作業が行われている

「適当に折り紙で輪を作ってつなげとけ。鎖みたいになアレだ」

『了解じゃ』

『代表！こんなものを手に入れてきたぜ！』

そういつて福村が出してきたのは万国旗だった

・・・どっから拾って来たんだそんなもん

「OK。それも使っとけ」

『了解した！』

「・・・使えるものは使うつてか？」

「教室がこのままの以上、なんでもいいから少しは見栄を張らないとな」

それもそうだな

こんなボロボロなうえに飾り気もないんじゃ、来てくれた人に対して申し訳ない

「問題は、給仕係だよな」

「ウェイトレスって言えよ。まあ、教室の規模を考えると三人でも回せると思うが」

「三人？だれ？」

「姫路と島田と秀吉だ」

「秀吉は男」

「使えるものは使ってことで」

・・・頑張れよ、秀吉

『代表、テーブルはどうするんですかい？』

「教室の段ボールを積み重ねてそれっぽく見せるぞ。レースでもかけりゃ・・・」

「異議あり！ 別につきつける証拠とかはないけど異議あり！」

とりあえず、ビシツと真っ直ぐに雄二を指す

「ん？ 何か不満があるのか真理。指なんか突き立てて」

「当たり前だ。仮にもここは食品を扱う場所だぞ。衛生面は徹底しておかないと」

「大丈夫だろ。レースで隠れるように調整すれば・・・」

「めくって見た人がどんな反応をするか考えてみる」

「胸にしまっておいてくれるだろ。学園祭ごときで喚くバカはいないだろうし・・・」

甘いぞ。砂糖たっぷりのショートケーキに煮詰めた砂糖水かけてさらにチョコレートでコーティングしたくらい甘いぞ
ん？それって食べるのか？

「雄二、お前詰めが甘いつてよく言われるだろ？」

「お前にな」

「『喚くバカはいない』っていったって、『だろっ』の時点で可能性としてはゼロじゃないんだ。飲食店に限らず、人を相手にする職

業っていうのはイメージ一つでがらりと変わるぞ？成功させたいなら、そういうところにも気を配らないと」

「・・・」

「だから、そういった可能性は徹底的に排除しておくべきだと思うんだが？」

雄二は眼を白黒させている

おれは、なんか変な事言っただろうか

「・・・まあ、一理ある。じゃ、お前が責任をもって調達してこい」
「了解した、代表サマ」

「サマとかいうな気持ちわりい・・・」

やっぱ、タカさんの話はためになるなあ

鉄人なら、生活指導以外にも備品整備とかやってたな

冬休み直前、手がかじかむ中運ばされたのも、今となってはいい思い出だ

ということであれは職員室に行き、鉄人に協力を依頼した

「なるほど。確かに、そういうことなら段ボールではダメだな・・・

・よし、学校の備品からいくつか貸し出すぞ」

「ありがとうございます」

「と言っても、俺の権限で貸し出してよさそうなものは、Eクラスで使われていたキズモノぐらいだがな・・・問題ないか？」

「もちろんです、みかん箱を積み上げたのよりずっとましです」

「そうか。なら好きなだけもっていってくれ」

やっぱり、鉄人は話が分かるなあ・・・
ほどなくして机をいくつか運びこんで、文化祭への準備は万端となった

ここは夜の学園

体育館には春香・真・雪歩・美希と立会人の鉄人、指導役として俺がいた

「そいじゃ、操作レッスンを始めるぞ」

『お願いします!』

夜とはいえ体育館。その声は反響して静かな夜を崩す

「あ、あの・・・プロデューサー」

「なんだ真」

「よ、夜の学園ってお化けとかでないですよね？」

「苦手だったのか。まあ、お化けが出ようが西村先生見て逃げてくから安心しろ」

「・・・明日から、吉井の分の雑用もまわすか」

キコエマセーン

「西村先生。召喚許可を」

「分かった。召喚、許可する!」

召喚フィールドが、不思議な音を立てながら体育館一帯に広がる

「わぁ・・・」

「これがフィールドですか？」

「そうだ。この中でだけ、召喚獣は召喚できる。んで、こんなふう
に召喚するんだ。・・・試験召喚獣召喚、《サモン》！！」

幾何学的な魔方陣が俺の足元付近に現れ、次第に何かを形成してい
った

形成されたものは、デフォルメされた俺

赤いベレー帽、半袖のアンダーシャツ

ミリタリーパンツにナイフという格好だった
クラザーか

「へえ・・・」

「ちっちゃくて可愛いの」

「ホント、プロデューサーには勿体ないですよ」

「・・・それ、どういう意味だ？」

美希には、コスプレしたぬいぐるみにしか見えないんだろうな
俺の召喚獣を抱き上げる

「・・・」

「プロデューサー。どうしたの？赤くなっちゃって」

「い、いやぁ！なんでもないぞ。うん、なんでも」

「そお？なら、いいんだけど」

・・・観察処分者の説明は省こうか

「ねえ真くん。ミキたちも召喚してみようよ！」

「じゃ、春香ちゃん私たちも・・・」

「うん、いいよ。それじゃ、いつせーのーでっ！」

『サモン！』

今度は四人の足元付近に魔方陣が現れ、召喚獣があらわれた

「あれ？この服ってなんなの？」

「おしゃれですけど、戦うわけじゃなさそうですね？」

「武器も持ってないみたいですよ」

へえ、デフォルトってウチの制服なんだ

「あ、うちの制服だね。西村先生、どういふことですか？」

「まだ戦争用の調整がされてないんだろ。ま、二、三日経てば反映されるだろう」

「そうですね。ありがとうございます」

組み手とかやりたかったけど、それじゃあ無理だね
とすると、移動とか基本的なことだけでいいか

「それじゃ、簡単な操作からやってみようか」

『はい』

こうして俺、浅井真理の清涼祭までの日々は過ぎてゆくのだった

準備期間（後書き）

大変です

バカテスを基軸にアイマスを絡ませようと思ったら、試召戦争編で構想が行き詰ってしまいました

転入させるのはベタすぎますし（というか現実考えたら全員は厳しい）、かといってバカテスキャラだけで進ませたら、クロスになりませんし

『アイマス勢が最低一人でもいればよい』ならば、案はあるのですがそれってクロスって呼んで大丈夫なんですかね？

作者自身、結構手探りなので感想や要望があればお願いします

清涼祭

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにな」

「そういうやつだよ。あいつは」

ホント、いつ見てもあいつは火がつくとすごい

清涼祭初日の朝

俺らのクラスは小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた

と言っても、壁を見ればどれだけボロボロなのは一目瞭然だがな

「カーテンみたいなものでもかけて、壁隠せばよかったかな？」

「いや、逆手にとれるかもしれないぞ？」

「え？」

「逆に考えるんだ。『こんなボロボロの教室なのに喫茶店かあ。相当衛生面には気を使ってるんだろうな』って思わせることもできる」

「実際、使う机や教室も徹底的に掃除したもんね」

「ああ。後ろ指を指されるような部分はすべて排除したつもりだ・
・後は、接客や料理次第だな」

厨房はムツリーニが指揮を執っている

あいつも確か火がつくとすごい人間だったよな

・・・・Fクラスって状況次第では天才になりうる奴らばかりだな
誰かいつてたつけ。『バカと天才は紙一重』って

「それにしても、秀吉。よくこんな綺麗なクロスを持ってきたな」

「うむ。ワシも力になれるようなことがあって嬉しかったぞい」

このクロス・・・ひょっとして演劇部の小道具だろうか
そうすれば結構上質な生地であることも説明がつく
シミができたかどうか

「室内の装飾も完璧だし、これならうまくいくよね」

万国旗が気になるが、学園祭としては充分なほどの完成度だな
これなら客足は満足するものとなるだろうな

「・・・飲茶も完璧」

「おわっ」

「っと。相変わらず、気配を消すのが上手いな。ムツツリーニ」

日常からそんなことをしてるのは修行だろうか
忍者にでもなる気なのか？

・・・いや、コイツは隠し撮りのためか

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「・・・味見用」

出て来たのは、胡麻団子だった

「わぁ・・・おいしそう」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「・・・（コクリ）」

「では、遠慮なくいただこうかの」

「んじゃ、俺も貰うわ」

ムツツリーニの胡麻団子、作りたてなのかあったかい

勢いよく頬張ってみると

「お、おいしいです!」

「確かなな・・・表面はカリカリで中はモチモチ。それでいて甘ったるくないのがいいな」

他の試食者を見ると、姫路と島田はトリップしていた・・・まじかよ。これなら料理の方は万全だな

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても　んゴパっ」

「明久あっ!?　口からありえない音がしたぞ!?!」

秀吉は早く明久を蘇生!

「りよ、了解じゃ」

秀吉の蘇生により、明久は一命を取り留めたようだ

「ふう・・・一時はどうなるかと思ったのじゃ」

「う・・・うーん?」

ああ。よかった

「ムツツリーニ、毒を盛ったのか!?!」

「いや・・・そんなはずは・・・ハッ!」

「どうしたんだムツツリーニ?」

「俺が作った胡麻団子は4つ・・・ひとつ多い・・・」

『ま、まさか・・・』

ギギギとでも音がなりそうなほど強張って、三人が姫路を見た
まだトリップしているみたいだな

「姫路がどうかしたのか？」

「ああ。真理は知らないんだったね」

「何をだ？」

「・・・世の中、知らない方がいい事は結構ある」

まさか、姫路が作った胡麻団子とでも言いたいのだろうか

いくらなんでも食べた瞬間倒れるような料理なんて、毒を盛らない
限り作れるわけがないだろう

作っても黒コゲとかの方が説得力がある

姫路がそんな危ないものを使う訳もないだろうし・・・

「うーっす。戻ってきたぞー」

「お、雄二か。どこ行ってたんだよ」

「ああ、ちよつと話し合いにな・・・」

珍しく歯切れの悪い返事だな

何かを隠しているのがモロバレだぞ

だけどあいつが隠すことっていうのは大抵不器用から来るものだしな
言及はしないにしようか

「そうですかー。それはお疲れさまでした」

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでも行けるな？」

「バッチリじゃ」

「・・・お茶と飲茶も大丈夫」

あの卒倒飲茶がまだあるかは確認のしようがないが・・・
せめて食中毒がうちからでないことを祈ろう

「よし、少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリー二に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？ あんたたちも召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あつてね」

色々あつて・・・か

「もしかして、賞品が目的とか・・・」

「やめとけ島田。色々つて濁した以上、大方答えられないような事情でもあるんだろ」

そうでなきゃ、バカコンビで参加する必要性がわからない
へタしたらとんだ恥さらしだしな

「う・・・」

「そう？・・・なら聞かないで置いてあげるけど・・・」

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「う、うん・・・」

そういつて、二人は教室をあとにした

「なんか、真理にはなんでもお見通しって感じだね」

「そういうトコ鋭い奴だからな。それでいて、自分の隠し事は何一ついわねえ」

「そういえば雄二、あの時学園長が『神童』がどうかいったの
つて」

『さすがは神童と呼ばれていただけのことはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか。ま、礼儀はもう一人の方がいいがね』

この間交渉に行った時、そんなことを言われたのだ

「・・・」

「もう一人っていうのはもしかして・・・」

「・・・行くぞ。ホントに一回戦が始まっちまう」

「あ、うん・・・」

どうも、喋りたくない所に触れちゃったみたいだった
過去に何かあったんだろうか・・・

「さてと、それじゃ、俺もちょっと離れるぞ」

「どうしてじゃ？」

「ちよつとエスコートしないといけない人たちがいるんでね。俺がこっちにいれる時間は少ないかもしれないけど、任せたぞ」

「了解なのじゃ」

「あと、他の奴らには黙つといてくれ。後でうつさいから」

「分かったわ」

「それじゃ、喫茶店の方任したぞ。時々様子見に来るからな」

とにかく、機材の準備しないとな・・・

裏方として忙しい学園祭になりそうだな

「浅井は何なの？」

「でも準備を積極的にやってくれたのは真理なのじゃから、少しぐ
らいの暇は許してやってくれんかの？」

「そうですね……。それにしても、一体誰をエスコートするんで
しょうか？」

「エスコートなんて言い方するのじゃから学園外からの女性、とい
うことは間違いないと思うのじゃが……」

「そういえば、今日って外部からアイドルがくるんだったよね」

「そうでしたね。それで、召喚大会の方にもゲストで参加するんだ
そうですね」

「空いた時間は、きっと清涼祭を楽しむのじゃろうな」

「だろうねー。いいなあ」

『……………まさか』

華のある裏方

「照明などはここからお願いしまーす！」

ふう。機材搬入も楽じゃないね・・・意外と重いし

「あ、プロデューサー。おはようございます！」

「お、真。早いな」

「えへへっ。プロデューサーの学校っていうからボク楽しみで！」

そいつは嬉しいな

「プロデューサーさん、私たちもいますよ」

「お、おはようございます」

「おはようなのっ」

「まあ、来てくれたのはいいが、お前たちの試合まで結構あるぞ」

「それじゃ、一緒に回りましょうよ！」

「ああいいぞ。だったら・・・すいませーん！アレ出してくださいー
い！」

『はいー！』

衣裳さんに頼んで、この日のために用意しておいたあれを出す

「あれ・・・ってこれですか？」

「そそ。文月学園の制服」

先人はいった。『木を隠すなら森の中』と

なら、人を隠すなら人の中。アイドルを隠すなら一般人の中・・・
という訳だ

結構高かった・・・

「四人とも、これに着替えてこい」
「はい」

タダイマキガエチユウ・・・

「着替え、終わりましたっ」
「わ、私も・・・」
「サイズもぴったりだし、結構いい感じなの」
「・・・」

おー、にあってるじゃないか
特に春香なんてもう一般の生徒と見分けがつかないくらいに

「あの、プロデューサー」
「ん？どうした真？」
「何でボクだけ男子用なんですか？」
「いや、真ならこっちなって・・・いやか？」
「いやです！ボクも女の子用のほうがいいです！」

そっいうと思っただよ・・・

「えー。でも真くん。それ似合ってるよ？」
「え」
「うん。真ちゃんは、そっちのがいいって思うよ」
「えー・・・っと」
「俺からも、ひとつ頼む」

女子4人と男子1人だったら、見せかけだけとはいえ女子3人、男

子2人の方が歩きやすい
おもに俺の心としては

「ほんとにボクだって女子用の着たいのに・・・」
「ホントすまん」

しぶしぶ承諾してくれたようだ

まあ、一般思考としては『アイドルがウチの制服、しかも男子の着
てるとかあり得ない』って感じだろうから、自然にいれるだろうし

「それじゃ、設備の搬入も終わったようだし、ちょっと回ろうか。
はぐれないようにな」

『はい』

「んじゃ、どこから回る？」

「ボクはプロデューサーのクラスが良いです！」

「え・・・まじ？」

「はい！ 混雑しないうちに行きましょうよ！」

「しょーがないなあ・・・」

ということでもた戻ってきました『中華喫茶ヨーロッパアン』

「いらっしやいませ・・・って浅井くん？」

「おう姫路。調子はどうだ？」

「はい。始まったばかりなので何とも言えませんが、出だしは順
調みたいです」

みたいだな。空席よりも人のいる席の方が多みたいだ

「ところで浅井君。・・・後ろの四人は？」

「ああ。俺がエスコートする事になった後輩四人」

『こんにちは』

「ふふつ。こんにちは。では、お席の方まで案内しますね」

どうやら俺のことはお客として扱ってくれるようだな
さすが姫路

「でも、エスコートなんて言うから、私てつきりアイドルの子たち
かと思ってましたよ」

『っ！？』

「まさか。俺なんかがアイドルと縁があるわけないだろ？」

「それもそうですよね。メニューはこちらになります。ご注文が決
まりましたらそのベルでお知らせください」

そういつて姫路は去っていった

「プロデューサー・・・何やってるんですか」

「いや、まさかエスコートなんて言い方でそこまで核心をついてく
るとは思わなかった」

姫路瑞希・・・恐ろしい子

「んで、なんにする？」

「ボクは杏仁豆腐とウーロン茶で」

「じゃあ私は胡麻団子でも」

「わ、私はあんまんを・・・」

「ミキも、真くんと同じので」

ガタン！

突然大きな音がした

「おいおい、んだよこの机！傷だらけじゃねえか！こんなもんで料理を出そうっていうのか！？」

「この点心もくそまずいし、やっぱアホどものFクラスだな！」

おいおい、学園祭にクレーマーかよ・・・
みかん箱じゃなくてよかった

「あの、お客様・・・」

「ああん？どうでもいいから、さつさと代表者を呼んで来い！」

「こんなチャチなモノで金を取るうなんてふざけんじゃねえ！」

タチの悪い奴らだな

「うう・・・」

「雪歩、大丈夫だよ」

「・・・真。ちよつと雪歩見ててくれ」

「は、はい・・・分かりました」

席を立ちこつそりと奥の方に戻る

「あ、浅井つ。アンタ今までどこに・・・」

「シート。とりあえず秀吉は坂本に、島田は鉄人にこのことを伝えにいつて」

「わ、分かったのじゃ」

「う、うん」

「あと、お前たちは『割引券』を今いる人数分作っておいてくれ」
『何故だ？』

「こんな迷惑をかけてしまったんだ。それぐらいは店からもサービスしない」と

『そういうことなら・・・』

駆け出していく秀吉と島田

・・・よし、上手くいくかはわからんが、代表が来るまで時間稼ぎと行こうか

俺だってFクラスなんだし、これくらいはしたって誰も文句言わんだろ

「さつさと代表者をよべよ！」

「それとも弁明の余地がないから出てこないのかあ？」

好き放題言ってくれるな・・・

「お客様、いかがなさいましたか？」

「ああ？ お前が代表者か？」

「私は代表代理です。代表は召喚大会に出場中のため現在この場にはおりません。只今、係の者に呼びに行かせています」

「けっ。はつつけたような敬語使いやがって」

「・・・それで、このような非常に迷惑な行為をなされた理由を、お聞かせ願いたいのですが？」

ホントム力つく奴らだな

雄二だったら『パンチから始まる交渉術』とか言って殴りかかりそうだな

「はっ！見ての通りだ！んだよ、この汚ねえ机！」

「おまけに点心もマズイ！なんて金取ろうとしてんじゃねえよ！」

「・・・それだけですか？」

「それ以外に何があるってんだよ！」

・・・それだけか

「お言葉ですが」

『なっ・・・』

「壁やその他設備を見てもらってもお分かりになる通り、ここの設備は他のクラスよりも飛び抜けて貧相な設備となっております」

「そりゃそうだろう！　なんたってバカどもの集まりのFクラスだもんな！」

「最近試召戦争にも負けたりしいしな！」

そついつて、ガハハ笑いだす二人

「確かに、Fクラスの連中はバカどもかもしれませんが、そのバカどもが必死に知恵を絞りだしてこの喫茶店を始めたんです」

黙って聞いてくれるようだな

ここで喚きだしたら一発殴ってでも聞かせたところだったな

「貧相な設備であるFクラスで食品を扱うということは、衛生面などの問題が山積みでした。それを、Fクラス一同なんとしても成功させたいと考え、一丸となって問題を一つ一つ解決していったのです」

「だ、だけだよ・・・」

坊主の方が何か言おうとしたようだが、声を張り上げて遮る

「そして、あなた方が傷だらけで汚いといったその机・・・実はFクラスのものではないのですよ」

『はあっ！？』

「お恥ずかしい話ですが、Fクラスの机はみかん箱です。そのようなので大切なお客様方に食べ物を召し上がっていただくことなど、出来るわけがないじゃないですか。だからこそ先生方に頭を下げて、無理をいって備品を借りたのです」

「・・・」

「そのあと、一つ一つを全員で丁寧に磨きあげたのがその机です」

「う、うるせえっ！」

あー。ホントにうるさいな

「・・・そろそろ、うるさいのはあなた方のほうであることを自覚したほうがよいのではないでしょうか？」

「なっ・・・」

ここで、外野の声を聞いてみようじゃないか

『そうだ！』

『一生懸命手間をかけて準備してくれた子たちに申し訳ないと思わないの！？』

『それにこの点心だってかなりうまいじゃないか』

『あんたたちは一体何が気に入らなくなったっていうの？』

「うぐぐ・・・覚えてるよっ！」

駆け出したクレーマーの二人

しかし、入口にいた大きな男にぶつかり尻もちをついた

「どこに行こうというんだ？ 常村、夏川」

『げえっ！ 鉄人！』

ナイスタイミングだ鉄人

「文化祭で営業妨害をやらかすのがうちの3年、しかもAクラスの奴だと思つと頭が痛いな・・・」

「は、放せっ・・・」

「ふ、ふりほどけねえっ・・・」

「とにかく、お前たちを指導室に連れていくぞ。どうしてこんなバカなことをやったのか、聞きだす必要があるからな・・・」

『いやだあつ！』

あの二人、常村と夏川。面倒だから常夏コンビで良いか・・・は、そのまま鉄人に引きずられていった

「大変見苦しいものをお見せいたしました。不快な気分になさせてしまったというお詫びとして、係の者がお配りしています『割引券』を提示していただけますと合計金額より二割、割引かせていただきます。このような対処しか我々ではできることはございませんが、何卒御容赦願います」

とりあえずこの場は収まったか・・・

鉄人の城である指導室に連れてかれては、しばらくあの二人も身動きとれまい

「ん・・・」

割引券が配られないままに席を立つ人間がいた
ありゃ、教頭じゃねえの？
何だかアヤシーな・・・

華のある裏方（後書き）

真理は両手に花どころか、そのうち持ちきれなくてあたふたするんじゃないでしょうか

というか、複数のアイドルを同時に扱うのって難しいですね
暫くは真理+@の一对一な感じになると思います

とりあえず、異端審問にでもかけられればいいと思います

楽あれば苦あり

「さて・・・真理」

ふとそこを見れば、雄二と明久がいた
で、首根っこ掴まれて裏へと連れてかれた

「てめえ・・・いきなり出てきて、何かつてに割引きとかしてんだ？」

独断専行だもんなあ。そりゃ怒られるわ
ホウレンソウは仕事の基本だつて言つてたしなあ

「当然の処置だよ。クラスの利益は落ちるけど、迷惑をかけたせめ
ても償いだよ」

「殴つて黙らせれば早いだろ・・・」

あ。こいつが来る前にコトが終つてよかった

「そのあと、『代表は暴力を振るう』なんて悪評が流れたらどうす
るんだ？」

「考えすぎだつて・・・」

「いいか明久。人を相手にする仕事に考えすぎとかそういうのはな
いんだぞ・・・イレギュラーなことにも対処できるようにしておい
て損はないぞ」

「まるで、人を相手にする仕事をやったことがあるかのような口ぶ
りだな」

実際やってるし、心遣いも聞いている

「まあ。たしかに、もめごと後の事後処理としては悪くはないと思うぞ。客も割引に目が眩むだろうし」

「だろ？」

「だが、割引いた分の額は、お前から徴収する」

「はあっ!？」

「現場監督は、何事にも責任を負う。それこそ、自らが起こした不利益についてもな」

「うう・・・仕方ないな」

今月、生きていけるだろうか・・・

二割といってもこの人数だ。結構な額持つてかれる気がする

「いやーそれにしてもかつこよかったですよプロデューサー!」

しかし、割引された額については俺の負担

・・・明後日には、お財布の中では木枯らしが吹き荒んでいるだろう

「あの小悪党にビシツと言えるなんて流石ですね!」

「ん? ああそうか?」

でも正直あれは誇大表現を使っただけ・・・

一生懸命準備したと言っても他のクラスよりはずっと短い。何たって野球してたんだからな

それに、成功させたいとは思っていても、どうしても考えている

のはほんの一部だし・・・

机についてだって実は軽く水拭きした程度だし

「でも、衛生面に気を使ってるなら、安心して食べることができま
すね」

「お昼もあそこに行きたいです」

「そ、そうか？ 気にいってもらえたようでうれしいが、どうも時間
みたいだな。春香と雪歩は出場準備だ」

「「はい」」

「じゃ、真と美希は自由に回っててもいいし、俺たちが戻ってくる
までここに居てもいい」

「わかったの！」「はい」

「んじゃ、各自行動開始」

という事で、春香と雪歩を引っ張って、特設ブースへと急いだ

「ねーねー真くん。何してよっか？」

「そうだねー・・・美希はなにがしたい？」

「んー・・・。ミキね、真くんとならどこでもいいかなって」

「・・・今日の召喚大会に出るゲストアイドルって星井美希ちゃん、

菊地真、萩原雪歩、天海春香だっけ？」

「ああ。俺すっげえ楽しみでさ、夜も眠れなかったよ」

「でもさ、美希ちゃん以外あんまりきかない名前だよな？」

「確かに・・・だが、アイドルだぞ！？ アイドル！」

「やっぱり、来てくれるっただけでもテンションは上がりますなあ」

「・・・ボク達、まだまだみたいだね」

「ミキ達は、結構人気みたいだね」

『おい、あの子、美希ちゃんに似てないか?』

『まさか、さつき浅井が連れてきてた子だぞ? あり得ないっつの』

『・・・最近の行動には不可解な点が多い。だが、今のところアイドルとの関係について情報は掴んでない』

『じゃあ、やっぱり他人の空似かなあ・・・』

『夢を見てるな。ウチの制服着てるわけもないだろ』

「・・・だから、プロデューサーは制服に変えたんだね」

「案外ばれないんだね」。なんか、こう、ここにいるぞ! って叫びたくなるよね」

「や、やめなよ美希・・・」

『とりあえず、浅井は処刑だ』

『級友を処刑するのは忍びないが。我らFFFの血の盟約に背いたからには致し方のないことか』

『さて。モテナイあいつがどこからあんな可愛い子たちを連れて来たか聞きだしてからだぞ』

『・・・だが、今は設備が大事』

『それもそうだな。これ逃したらあと3か月はみかん箱だし・・・』

『清涼祭の打ち上げの時にも』

「・・・ねえ、真くん」

「なに、美希?」

「ミキね、もう自分から正体ばらしたりしない」

「・・・うん。それがいいと思う。じゃ、行こうか?」

「うん！お代は、プロデュ・・・真理くんにつけてて欲しいの！」

『真理コロス！』

「さて明久。俺たちも店の手伝いやるぞ」

「真理が勝手に動いた分、僕らでもとり返さないかね。さあゝて・・・」

そういつて、僕らは店の手伝いに回ろうと立ち上がる

「あの、坂本くん、明久くん・・・」

「なに？姫路さん」

「あの・・・真理くんの連れていた子たちのことなんですけど・・・」

「ふう・・・」

「あー・・・疲れたあ」

「おめでとさん」

二回戦は見事勝利

操作ついでに補習やっというてよかった・・・

「やっぱり、プロデューサーさんの指導のおかげですよ」

「・・・出来れば、真理でよんでくれ。あんまり感づかれたくないから」

「わ、わかりました。じゃあ・・・真理くん！」

「おう、いいじゃねえか」

「えへへ・・・」

「それで真理さん。私たちはどうするんですか？」

「んー・・・美希と真と合流しようか」

Fクラスにいくと、そこに真と美希はいなかった

「自由行動OKって、俺言っただからか・・・」

まあ美希はともかく、真は真面目な方だからそこを当てにしてる訳なんだが・・・

「おい、浅井」

「ん？ なんだ福村？」

「黙って死んでくれ！」

「はあっ！？」

そういつて、グーパンチしてくる福村

腕をつかみ、足をかけて転ばせる

なぜ、俺が殺されなくてはならない！？

「ぐっ・・・今は接客で忙しいが、後夜祭の時、覚悟してろ」

「・・・俺、なにしたんだよ」

「うるさいっ！とにかくお前へのツケだ！しっかり払え！」

「あ、ああ・・・」

領収書を受け取り、さっと目を通す
・・・って

「7200円！？いつからここは高級料亭になったんだ！？」

「・・・二割負担分と、免罪費」

「はあっ！？なんだそれ！？」

財布には、木枯らしも吹かなくなりそうだった

「・・・」愁傷さまです

「くっ」

ここは召喚大会会場

なんでも大会のためだけに特設したステージだそうだ

「さて、真、美希。いけそうか？」

「うん！バッチリって感じかな・・・あふう」

「ボクも、結構いける気がします」

うん。そうしてもらえると、指導した甲斐があるってもんだよ

「そっいえば、テストの方はどうだったんだ？」

「あ、アレですか？ ちょっと勝手が違って不思議な感じでした」

文月学園のテスト

時間内ならば、400点だろうが700点だろうが、どこまでも点数を伸ばせるテスト

「でも、得意なところを集中してやれたので結構出来てると思いますよ」

「そっか」

ここのテストは不得意なところは無理に解かなくても次にいけるそれを上手く使えたようだな
細かい偏りができてしまう気もするけど・・・まあ仕方ないか

「春香と雪歩は、三回戦にコマ進めたぞ。頑張れよ」

俺たちゲスト組は、二回戦からのシード枠として付け足されていたおそらく、四回戦までの肩慣らしとか、（一般公開を）ねだるな、勝ち取れってことだろうな

「はいなのっ！」

「気合は十分だな。観客席で見てるからな・・・それで、お前たちはどうする？」

「私たちも、プロデューサーさんと一緒にいますね」

「そ。じゃあいくか」

そっいつて、控室を後にした

楽あれば苦あり（後書き）

前回どどーんと目立ったツケ、なお話でした

最近、連載を始めたこともあつてか、久々にプロデューサー業を再開しました

アカペラエンドだった難易度ハイパーにリベンジ
構成は千早・響・貴音。とりあえず大賞＋部門賞一つ取るのが目標
です

清涼祭大満喫

「緊張するなあ・・・」

「え？ プロデューサーは一般公開は四回戦からっていったから、別に緊張する必要はないと思うの」

「だからだよ。僕ら四回戦まで行かないと」

「美希と真くんなら、問題ないって思うな。・・・あふう」

そう言つて、美希はあくびをする

やっぱり、こういう時の美希って大物だよな

「二回戦がゲストとなんて、ついてるよね。あたしら」

「ほんとほんと。サクツと決めちゃおうよ」

スタンドを見てみると、腕を組んだプロデューサーと、春香が手を振っているのが見えた

「それでは、始めてください」

「真くん、いくよ」

「うん！」

「卯月！」

「有香！」

『サモン
試獣召喚！』

「始まったな」

幾何学的な魔方陣が展開され、召喚獣が姿を現す

「なんていうか、真ちゃんらしい召喚獣ですよね」

「美希の召喚獣かつこいいなあ」

真の召喚獣は空手着を着ている

十字架槍を持っているが、多分剣に対する補助だろう。見た目的に

美希の召喚獣は、黄緑色の衣裳を着ている。美希のステージ衣裳とお揃いだ

両手に拳銃を持っているから、多分中距離派だろう

「そういえば、美希ってまだ中学生でしたよね？テストは・・・」

「英語教師に頼んで、中三用の作ってもらった。そのとき、何度も高校生じゃないのか訊かれた」

美希は、ぱつとみ高校生っぽいからなあ

オシヤレとかに気を使ってるって聞くし、それで大人っぽく見えるんだろうな

相手の召喚獣は、まあ、一般的な剣と盾だった
珍しく、動きだす前に点数が表示される

英語

765クラス		Cクラス	
菊地真	92点	島村卯月	127点
	&	V S	&
765クラス		Dクラス	
星井美希	144点	飯島有香	87点

「み、美希ちゃんすごいですっ！私なんて・・・」
「まあ難易度の差もあるし、美希は基本からしているのすごいからな」

「あ、動きだした！」

まずは向こうからの先制攻撃
どうも、一対一に持ち込む作戦のようだ

「まあ、武器の相性だけで見れば問題ないだろうな」

「え？そうですか？」

「そりやそうだろ。銃と剣なら間違いなく銃の方が強いし、槍と剣
なんかには『剣術三倍段』なんて言葉もあるくらいだしな」

「『剣術三倍段』？」

「よくは知らんが、剣術で槍術に勝つには三倍くらいの努力がいる
ってことらしいぞ。まあ、初心者V S 初心者なら長物の方が有利だ
ろってことで」

「ふーん・・・」

まあ、戦いは武器の相性で決まるもんじゃないけどさ
技量は大体どっこいどっこいだから、まあ問題ないか

大したとんでん返しもなく、あっさり低い方を倒した美希が、真の
サポートに入って三回戦出場を決めた

「おつかれさまですつ！」

「おつかれさまなの・・・あふう」

「おう、おつかれ」

相変わらず、美希はマイペースだなあ

タカさんは手なずけてるんだろうか。それとも振り回されてるんだ
ろうか

ふと先輩が頭をよぎったが、すぐに消す

「ああ・・・緊張した」

「いい動きだったぞ」

ほつと胸をなでおろす真に、言葉をかける

「そうですか！？ありがとうございますっ！いや、槍なんて持ったことなかったら、自信なかったんですね」

「そうか？だったら槍捨てて格闘でいってもいいんじゃないか？」

「え？いいんですか？」

「いいも何も、お前の好きにやってみればいいだけだ」

俺、槍術なんて知らんからあーだこーだいえるわけもないし
結局好きにやれとしか言えないんだよな

「あの、プロデューサーさんっ！次まで時間ありますし、せっかく
だから清涼祭を楽しみましょうよ！」

「お、いいぞ。じゃあどこに行く？」

「ミキね、プロデューサーの行きたいところに行きたい！」

うえっ！ま、また面倒な・・・

「プロデューサー、僕達をちゃんとエスコートしてくださいよ？」

「・・・りょかいだ」

俺、コイツらに勝てる気しねえ

「う、うう・・・な、なんでいきなりこんなところに？」

「さっき飯食つてたから、まだいいかと思って」

「あ、穴掘って埋まっていたいです・・・」

『うばああっ！』

「うわあっ！ああ・・・びっくりした」

「・・・」

あれ？悲鳴が聞こえない？

ちよつと気になってそつちを見てみれば、かちこちになった雪歩がいた

「ゆ、雪歩？おーい・・・」

肩をゆすつてみたりもしたけど、返事がない。ただの

「きゃあああああつ！！！！！！！！！！！」
「うわあああああつ！？」

いきなりの大音響に、お化け役の先輩共々驚いてしまう

「お、お化けが・・・お化けが・・・。ぶ、プロデューサーあ。もう出ましようよあ」

ここにきて不意打ちの涙目＋上目遣い
なんだろう。ものすごく申し訳ない気持ちになってきた

「わ、わかった。俺が悪かった。だから泣きやんでくれ？な？」
「ぐすつ・・・ごめんなさい」

途中、何度もお化け役の人と鉢合わせしたが、そのたびに雪歩は大音響で叫んだ
ばったばったとお化け役の人をなぎ倒しながら、雪歩と俺は出口へとたどり着いた
今度からは、自重しよう

すみません、先輩の皆さん

「プロデューサー。ミキおにぎり食べたいの」
「突拍子もなく言うな。米使ってる場所があっても、多分おにぎりは売ってないんじゃないかな？」

「それでもいいの。ミキにも考えがあるからね」
「・・・?」

で、いわれるままにやってきました定食屋

・・・この本格セット、学園祭の域を超えている
つか、学園祭で定食屋とか渋いな

「いらつしゃい！お席の方は、こちらになります。ご注文は・・・」
「店員さん」

「はい？」

「ミキね、店員さんの作った、特性おにぎりが食べてみたいな。・・・
ダメかなあ？」

「かしこまりました！今すぐ作らせてもらいます！」

まさかの色仕掛け

俺もみんなも啞然としている

というか、あっさりひっかかるなよ店員A

『ちょ、光何やってんだ！？』

『特性おにぎりの注文が入ったんだ！俺は、これを作らないといけ
ないっ！』

『はあっ！？』

・・・ウチの学園ってバカばっかなのか？

「おにぎりおいし〜のっ！」

「プロデューサーさんっ。次どこに行きます?」

「んー……。あ、あれなんて」

「ああっ！ケーキ屋さんだ！行きましようよ！」

「へいへーい……。」

という訳で、今度はケーキ屋に入った

みんなそれぞれ食べたいものを注文している

「やっぱりケーキっていえばイチゴのショートですよー！」

「そうか？じゃあ、俺も二つ」

春香に倣い、俺もイチゴのショートケーキを注文する

真っ白なクリームの上にイチゴが一つ、雪化粧をしていた

「はむっ……。っ！？なんか面白い味です！」

「へえ。ぱくっ これって、塩か？」

「塩……。ですか？」

「そ、お汁粉とかじゃ、ついでに塩を少し入れると、甘さがより引き立つらしいぞ」

最近の塩スイーツとかも、多分そんな感じなんだろうな

「へえー……。今度、家で作ってみようかな」

「春香って、ケーキ作れるんだ」

「はい！ケーキだけじゃなくて、クッキーとかアップルパイとか、お菓子だったらいろいろ作れますよ」

ふーん……

お菓子作りって分量はかるのが大変って聞くぞ

普通の料理みたいに『ざっくり切ってドーン!』って出来ないから、俺には無理かもなあ

「そっか。今度、食べてみたいな」

「じゃあ、今度作って事務所に持っていけますね」

「おう。楽しみにしてるぞ」

「へへっ、プロデューサーっ。次は僕の番ですよ!」

「順番とか、あったんだ・・・」

「それじゃ行きましょ!」

という訳でやってきました、2 - A

雄二の大好きな翔子がいるところだ

というか結局、俺の要望一つも通ってねえや

「えーと、お店の名前は『ご主人さまとお呼びっ!』か。・・・誰のセンスだ?」

少なくとも、翔子じゃない

なんというか、Sの人って印象が

「ここ、執事&メイド体験ができるらしいんですよ!パンフレットにありました!」

「へー・・・。で、それをやりたいと」

「はいっ!こっ、ふりふりのメイドさんの服を着て、僕の女の子らしさをアップさせるんです!」

「・・・そつか。じゃあ、入るか」
「はいっ！」

という訳で、入店した

「・・・おかえりなさいませ、ご主人様」
「お、翔子。似合ってるな」

入店を迎えてくれたのは翔子だった

「・・・ありがとう」

「え？プロデューサーの友達ですか？」

「ああ。霧島翔子、二年の首席で俺の幼馴染」

「へえ・・・。あつ！僕、菊地真つています！それで、右から
天海春香、萩原雪歩、星井美希。よろしくっ！」

「・・・よろしく」

そういつてお辞儀をする翔子

元々清楚なイメージあるからかな。様になっている
雄二でなくてもイチコロだな

つか、今さらつと・・・

「・・・真理。この子たちは、ひよつとして今日来るアイドル？」
「あ」

「『あ』じゃないぞ真。まあ、自己紹介自体は悪くは無いけどさ」

翔子じゃなきゃ、ちよつとした騒ぎになってただろうな

「まあな。というか、お前ってそういうの興味あったんだ？雄二」

直線だとばかりに」

「・・・学園中で話題になってた。星井美希が来るって」

あれ？他の三人は？

「まあ、しょうがないか・・・ところで翔子。出来れば秘密に」
「・・・分かつてる」

「流石、こういう時に頼れるのは」

「ただし、今度雄二を捕まるのを手伝ってもらう」

不細工な悪友一人と、いろいろな意味で大切なアイドル
心の天秤がどちらに傾くかは、明白な事だった

「抜かりねえな、翔子。それと、執事&メイド体験希望者がいるんだが・・・」

「・・・分かりました。では、お席の方へご案内します。ご希望の方は、そのあとで私についてきてください」

「はいっ！」

素早く営業モードに切り替わった翔子に、真を預け、席に座る

「すごいところだね」

「だよなあ。流石Aクラスの教室つてところだよな」

「ええっ！？ここ、教室なんですか！？そっいえば、どこか高級ホテルのような・・・」

「ウチの事務所よりも、豪華な気がするの。あふう」

まあ、ラウンジやシャンドリアのある事務所なんてそうそうないだろ
逆にそんなところに人を通すとか、嫌味にしかならんとおもっし

「でも、こんな教室じゃ逆に落ち着いて勉強できない気が・・・」
「こんな中で集中してやれるから、Ａクラスはエリート集団なんだろうな」

「ぷ、ぷろでゅーさあ・・・」

そんな話をしていると、真がやってきた
ぴっちりした黒いスーツがとても似合っている

「僕、メイド服が着たかったのに、霧島さんが・・・」

まあ、そうなるわな

男子生徒の服着てたし。ああ見えて翔子は強いからなあ、最近

「真ちゃん！すごくイイ！すごくいいよ！」

「ミキも、真くんカツコイイって思うな」

「はあ・・・」

褒められてるんだから、溜息つく必要もないだろ

「僕にとっては、死活問題なんですよ・・・」

「それで、注文は？」

「ああっ！そうでした。んんっ！」

真は、咳払いをする

・・・あ、目が変わった

「ご注文はいかがなさいますでしょうか？・・・お嬢様」

きゅっ。ボタン

「か、カッコイイ・・・」

「やっぱり似合ってるの」

「ちょ、雪歩っ!？」

ヤバい、雪歩が倒れた

たしかにほんの一瞬見惚れたけどさ、様になってるって思ったけどさ
まさか、倒れるほどとは・・・

「うゝん・・・真ちゃんが・・・真ちゃんがカッコよすぎるよう・・・」

「ちょ、あっつ!」

顔が真っ赤だったため、おでこに手を当ててみれば、ものすごい熱
かった

ほっといたらシャレにならないと思う

「真!氷もつてきてくれ!大至急!」

「え?あ、はいっ!」

その後すぐに冷したため、大爆発することはない
ただ、ちよつとふらふらしていたため、暫くここでゆっくりするこ
とにした

「翔子、ダメだ。当分ここで厄介になる」

「・・・わかった。その間、真は借りる」

「了解だ」

「雪歩が倒れたのに、僕だけ接客なんて・・・」

「「人気だから、仕方ない」」

雪歩が戻ってくるまで、真の接客は続いた

「おかえりなさいませ。お嬢様」

「かしこまりました。奥さま」

「いってらっしゃいませ。ご主人様」

なんだかんだ言って、結構乗り気で執事役をこなす真だった

清涼祭大満喫（後書き）

真はなに着ても似合うと思う！ただし、80年代的なああいうのは除いて

各キャラの個性をうまく出してみようと四苦八苦したのですが、私の手にはあまりあまっているような気がして仕方ありません

とりあえず、真理は異端審問にかけられればいいと思う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5914z/>

バカとテストとアイドルマスター

2012年1月12日20時50分発行